

知性とは何か

— AI時代における国語教育をめぐって —

哲学研究者 山野 弘樹

1994年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。博士(学術)。千葉工業大学非常勤講師。専門は現代フランス哲学、VTuber スタディーズ。著書に『独学の思考法』(講談社現代新書)、『VTuberの哲学』(春秋社)、『VTuber学』(共編/岩波書店)、『20代からの文章読解』(大和書房)、『対話の思考法』(角川新書)など。日本哲学会優秀論文賞、日仏哲学会若手研究者奨励賞などを受賞。



私は二〇二五年から千葉工業大学における初年次教育を担当しています。新一年生に対して「文章力の基礎」を教える、それが講義内容です。ただし、二〇二五年という年は、「生成AI」が世界中で爆発的に普及した年でもありました。例えば、OpenAI社の「ChatGPT」は、二〇二五年三月末の時点で週間アクティブユーザーは約五億人でしたが、同年十月には八億人を突破しました。そして、仙台大学のAI教育研究チームが昨年十月に発表した全国調査により、七割超の大学生が課題のために生成AIを活用している実態が明らかになりました。

また、昨年八月二十一日にMMD研究所が発表した「高校生のスマホとAIの利用実態調査」でも、すでに六割超の高校生が生成AIを活用しているという結果が示されています。こうした状況を見れば、今や「AIを使わずに課題を解く」という時代は終わってしまったと言わざるを得ません。

生成AIは大変優秀で、例えば「〇〇について時系列順にまとめて、

その傾向を複数の観点から分析して」と指示を出せば、かなりの精度でそうした作業を行ってくれます。また、PDFファイルやグラフを読み込ませて「この資料から読み取れる内容を簡潔書きでまとめて」と指示を出せば、驚くほど簡潔に分析結果をまとめてくれます。

しかし、多くの教育者がすでに指摘するように、「AIに頼りっぱなし」の運用が学生たちの思考力向上の機会を奪ってしまうことも事実です。例えば、上記のような課題が出されたとき、その問題文通りの文章をAIに打ち込めば、数分もかからずに課題を終えることができてしまいます。その場しのぎとしてはこれ以上ないほど強力ですが、これでは「自分で考える力」は一向に伸びません。それはちょうど、「チキン南蛮定食を作ってみよう」という課題を出されたときに、真っ先にオリジン弁当に行つて「タルタルチキン南蛮弁当」を購入してくるようなものです。

ただ、(分かりやすさを優先して)このような比喻で考えてみた結果、次のような指摘がなされるかもしれません。それは「情報過多の現代社会において、時短できる選択肢があるならむしろ積極的に活用すべきではないか」というものです。確かに、こうした指摘も一理あります。しかしこの指摘は、次のような事態を見落としてしまっています。

例えば、私たちはたとえ料理を上手く作ることができないとしても、提供された料理の美味しさをなんとなく判断することができます。そして、「この値段でこの味ならお得だ」と感じたりします。「料理のスキル」と「吟味のスキル」はそれぞれ独立しています。

ですが、「思考するスキル」はどうでしょうか。例えばAIに質問をして、「これが回答です」と提示された長文の分析結果が「本当に信頼に足るか否か」を、私たちはどうやって判断すればよいのでしょうか。「味覚」という比較的単純な感覚器官であれば、ものの善し悪しは多かれ少なかれ分かったりします。ですが、「思考」という高度な能力は、訓練もなく一朝一夕に使いこなせるものではありません。AIの回答の善し悪し

を判断する力は、依然としてAIユーザー（一般市民）に求められます。

それでも「いやいや、AIに聞いていけば正確な——あるいは、人間が手作業で考えるよりはよほど妥当な——回答を教えてください」のだから、AIに全部任せればいいじゃないか」と考える人はいるかもしれませんが、そういう方は、ぜひ、同じ質問を複数のAIに投げかけてみてください。例えば、試しに「なぜ日本のアニメは世界的な人気を獲得したのか？」という質問を「Gemini」、「Perplexity」、「Claude」、「ChatGPT」、「Grok」に投げかけてください。どれもちよつとずつ違う分析結果を出してきます。また、質問の内容によっては、AIは平気でハルシネーション（幻覚）を起こします。学生がたまたま存在しない文献を平気でレポートに書いてくるのは、AIのハルシネーションを見破ることができていないからです。さらに、AIを開発・運営する会社の理念や方針によって、回答の方向性も大きく変わってきます。

こうした事態から分かるのは、「AI時代」という言い方をしたときに、「AI」という存在を単数形で考えてはいけないということ。AIによる回答の出力に際して、「こうした回答が望ましいだろう」という論理的ないし倫理的な方針を定めるのは運営会社の人間たちです。AIという技術の総称（匿名性）の裏側には、企業の中で働く人間たちの顔が隠れています。「AIに思考を規定される時代」とは、つまるところ「AIのサービスを開発・提供する会社に思考を支配される時代」に他なりません。私たちの世界がこうした時代に突入しつつあるということ、を、国語教育の現場において教育者は伝えなければなりません。

では、こうした時代において求められる知的態度とはなんでしょう？ それは、「AIだけに思考してもらおう姿勢」でもなく、「AIを使わずに思考する姿勢」でもなく、「AIと共に考える姿勢」です。この第三の道を歩み抜くために必ず求められるのが、「問いを見つめる力」です。

例えば、私が去年から担当している初年次教育で使われる教科書では、「次のくだけた文章を丁寧な言葉で表現しなさい」という問題がたくさ

ん出題されています。ただ、こうした問題は、それこそ各社AIが最も得意とするものであつて、ありとあらゆる「丁寧な表現」を驚くほど網羅的に提示してくれます。このように、「二問一答形式」（あるいはそれに近い形式）の出題に関して、AIは無敵の強さを誇ります。これは、むしろ人間がどんどん頼っていいものです（それは、ちょうど私たちが計算をするときに電卓に頼るのとほとんど変わりません）。

「正しい敬語表現に直しなさい」といった問題であれば、AIは決まりきった「正しい答え」を出してくれます。しかし、世の中の問いはそのようなものばかりではありません。確定した答えがない問いに対して、各社AIの回答はバラけます。信頼性の度合いもまちまちです。そうしたときに、私たちはAIに対してさらに問いかける——つまり、続けて質問する力が要求されます。例えば、「なぜ日本のアニメが世界的な人気を獲得したのか」という問いに対して「ChatGPT」は「日本のアニメは分かりやすさよりも分かりにくさをウリにしており、これが現代社会の孤独や不安と相性が良かったから」といった回答を（つい先ほど私に対して）行いましたが、これに対して、「なぜそう言えるのですか？」とさらに質問を加えるのです。例えば、「現代社会の特徴として孤独や不安を指摘できるのはなぜか？ それをもたらしした技術的・文化的背景は何か？」などと質問を加えると、もう少し具体性のある（マシな）回答を「ChatGPT」は出力してくれます。また、質問者の反論が妥当であると認めると、AIはあつげなく「先ほどの回答は間違っていました」と誤りを認めてきたりします。やはり、鵜呑みにしてはいけません。

AI時代において求められる知性とは何か？ それは「問いを投げかける力」に他なりません。確かに、こうした知性のあり方は二〇二五年以前から盛んに提唱されてきたものです。しかしそれは、「AI時代を生き抜く必須スキル」として、今後さらにその重要性が高まっていると言えるでしょう。そして、こうした知性を子どもたちが身につけられるかどうかは、私たち教育者の国語教育にかかっています。